

ああ、相談業務

～美緒さんの話～

4

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

美緒さん家族

美緒さんは一人っ子で、父親、母親との三人暮らしである。父親は42歳の会社員、母親は40歳のパート職員、美緒さんは17歳で普通高校3年生であった。自宅は少し年季の入った一軒家で、中古で買ったのかなと思われる家である。

相談が始まる

そろそろ歳も暮れようかという12月下旬のある日、母親からの相談が入った。未成年の娘が妊娠してしまったが、どうしたらよいかというのである。

最近、SNSで知り合って、遠距離だろうが何だろうが、恋人づくりが盛んである。彼氏の話はあつという間に別の彼氏になっていたりもす

る。そんな状況で、彼氏と初めて会って、そのまま妊娠してしまうケースも増えているが、当時はまだスマホの時代ではなく、ピッチとか携帯が少し普及し始めたころだった。一人っ子の娘のために、携帯を買い与えたところ、出会い系で連絡を取り合った人と会っていて、その結果妊娠してしまったのである。当時はごく普通の目立たない子にもこんなことが起こっていた。

相談が始まった時にはもうすでに妊娠8か月にもなっていた。母親が気づくのが遅れたのは、元々生理不順がある子だったことと、当時のダボっとしたファッションの問題もあったという。お腹が出ていても余りわからない上に、美緒さんはちょっとぽっちゃり系なので猶更目立たなかったようだ。しかも高校は殆ど休まず通っていて、制服を普通に来ていたし、体育も普通にこなしていた様子で、母親は全く気付かなかったという。外泊してくるようなことも余りなく、たまに友達の下に泊まりに行くという程度で、彼氏の話をすることもなく、まさかそんなことになっていたとは思っていなかったと話していた。

今回妊娠がわかったのは、たまたま制服が少しきつそうに見え、太ったのかなと感じ始めた母親が、冗談半分に「そのお腹、赤ちゃんでもいそう。」と言ったところ、美緒さんがポロポロと泣きだして、「実は・・・」と話してくれたのだそうだ。美緒さん自身はどのようにかわからず、友達にも母親にも相談出来ず、ずっと困っていて今に至ったということであった。本当に妊娠なのか、相手は誰なのか、どうするつもりかなどを父母と美緒さんで話し合ったが、話がまとまらない。美緒さんは生んで育てると言っているが、とても無理だと思うから、養子に出したいと父母は思っていると話されていた。

経過

最初にすることは、母親の動揺を抑える事。我が子が、まだ高校生と言う状態で妊娠した、しかももうおろせそうもない、と言う状況に慌てふためいている母親を、何とか落ち着かせる。ゆっくり話を聴きながら、動揺が収まるのを待つ。そしてまずは動揺を抱えながらも、受診に付き添い母子手帳ももらいに行ってくれた頑張りを認めた。

相手が特定できる場合は良いが、大抵はいつの間にかいなくなって連絡も取れなくなるパターンが多い。結局女性だけが辛い思いをすることになるのである。相談員としても、そういう男への無責任さへの怒りと、警戒心が薄れた女の子たちの危険性を感じながら、対処していくしかない。母親が動揺している時に、相談員が憤りや不安を持っていては、母親の動揺を大きくするだけである。極めて冷静に対応するのが基本だ。

先ずはこの時期になっていては墮胎も出来ないのも、元気な赤ちゃんを産むことを第一に考えてもらいたいと伝えた。その為に、病院をどこにするか、妊婦健診をしっかりと受けさせて

行くこと、その際母親が付き添えるかなども確認する。勿論保健師に管理してもらうようにしようという話もする。母親も保健師から聞いているかもしれないが、若年妊娠は管理になる。担当保健師と相談員でも連携していくことを伝えて了解を貰う。その上で、美緒さん自身もお話しさせていただくことを了解してもらった。

更に今後のこととして、もし産んで育てるということであれば、未熟な美緒さん一人での子育ては難しいところもあると思うので、保健師の支援も受けながら、父母が支える事になるし、それが可能かという話も確認した。

美緒さん本人も、生まれた子を育てられないので預けたいということであれば、しばらく施設等（*1）で預かって少し大きくなってある程度手がかからなくなり、美緒さんにも育てる準備ができたところで戻すという形と、養子に出して、一切かわりたくないということであれば、特別養子縁組（*2）を希望される方の方所をお願いする形になるだろうが、いずれにしろ児童相談所の福祉司面接を設定し、赤ちゃんについて話をしていくことになるだろうと伝えた。

父母だけで勝手に決められるものではなく、美緒さん自身の意向確認が大事であることを丁寧に説明した。そうしないと、父母と美緒さんの関係性にも影響が出る。ただでさえ、美緒さんに対する父母の思いはとげとげした状態であろうし、美緒さんも父母に対して申し訳ない気持ちになっているであろう中で、美緒さんの気持ちをないがしろにして、父母が子どもを取り上げるようによそにやってしまうと、その後の親子関係に軋轢が生じ、美緒さん自身の今後が危うくなる可能性も高い。家を飛び出して、非行に走ったり、構ってくれる男性の元に走って、再び妊娠したりなども予想される。そうならない為にも、ここは父母が世間体とかを考えずに、生まれてくる子どもと娘のことを考えられるような冷静さを持たせることがとても大

事なのだ。

どのような方向にするか十分に親子で話し合っただけで決めて欲しいと伝えて次回の日程を正月明け落ち着いたころで2週間後に決め、次回は美緒さんにも来ていただくことにしてお帰りいただいた。

2週間後、母親に連れられて美緒さんが来てくれた。美緒さんは小柄でぽっちゃりとした、かわいらしい女の子で、高3と言うが、中学生くらいの幼さを感じられる子だった。口数は多い方ではないが、しっかり目を見て話すお子さんだった。今日は学校の帰りとのことではブレザーとスカートと言う制服を着てきた。お腹のあたりが膨らんでいるので、太っているのか妊娠しているのかは見た目ではわかりづらいものの、ウェストはきつそうに見えた。

相談員から「学校はこのことを知っているの?」と聞くと、「もう学校も終わるので話していない」という。「確かに3年生なので、1月末で登校は終わり、3月1日の卒業式とその前日の練習くらいしか登校しなくてよいし、運が良ければ、卒業式の頃は出産後になるかもしれない。もしかしたら出産が少し遅れて入院中ということも考えられる。出席をどうするか、また進路もどうするか考えているか?」と言う話になった。「もし学校に伝えたら退学になるだろうから」と母親も心配していた。「確かに学校によっては退学処分にすることもあるが、3年もここまで来て退学にするというのとも温情でそのまま卒業させてくれる学校もある。いきなり学校に言う前に、信頼できる先生に話してみるのも一つではないか、養護教諭も良いと思うがどうか」と話してみた。正直な話、1月末まで登校してしまえば、卒業式は体調不良で欠席しても問題ないし、学校が知らないまま子どもを産んだケースも無いわけではない。そこは本人に任せることにした。

「今後についてどうするかよく話し合ったか?」と聞くと、母親から「やっぱり世間体もあるし、いきなり赤ちゃんが家に来たら近所に

わかってしまう。親戚にも何て言えば良いか。私が生んだというにはちょっと・・・。」と言う。結局そう簡単に世間体を脱ぎ捨てられるものでもなく、父母と美緒さんの間でしばらくもめたようだ。一応、話し合った結果では、美緒さんもやはり子どもを育てるのは無理だろうし、この後の進学もあるので、生まれたらすぐ養子に出す方が良く納得したようだ。

本人に確認すると、それでよいというので、それではということで、児童相談所の福祉司との面談を設定した。

1週間後に、福祉司面談が行われ、福祉司からも、もし気持ちが変わったら教えて欲しいということと、生まれてから手続きが進んでいくので、それまでに乳児院の空き状況を調べ、空きがなければ里親を探していく予定であることが告げられた。いきなり特別養子縁組ではなく、先ずは一旦預かるという形になる。

父親はその場にいなかったが、母親も美緒さんもこの話に納得した様だった。あとは美緒さんが無事に子どもを産むことである。病院と保健師とも連携し、予定日に無事に子どもが生まれるよう待っていた。

予定日の二日後に陣痛が来たとの連絡が保健師からあった。そして、その後無事に生まれた。女の子だった。児童相談所にも連絡を入れた。女の子が欲しいという人は多い。幸い乳児院が受け入れられそうとの事。その後特別養子縁組も可能だろうと思っていた。

生まれてすぐ、保健師が病院に訪問し、様子を確認。母子ともに健康との事であった。美緒さんは赤ちゃんに初乳を与えたり、沐浴の練習をしたりと、赤ちゃんのお世話を一生懸命しているという。

そして明日退院と言う日に、母親から連絡が来て、「生まれてみたらとてもかわいくて、美緒もしっかり母親をやっているなのでこのまま家で育てるつもり。預ける話は無かったことにしてほしい」と言ってきた。直ぐに児童相談所に連絡し、この相談は終了となった。その後、

学校も美緒さんの出産を知ることになるが、卒業を認め、美緒さんは進学を諦め、赤ちゃんを育てながら働くことにしたそうだ。

まとめ

望まぬ妊娠とは、度々出会う。妊娠初期に墮胎してしまうことが多いが、誰にも相談できず、ただただ月日が経ってしまい、出産するしかない状況に追い込まれるケースもある。特に未成年の場合は、生理不順や妊娠症状について知らないことなどのため、発覚が遅れてしまう。

最近特に、スマホ、SNSの普及から、簡単に出会いがあり、簡単にセックスして、結果妊娠してしまうことも増えた。緊急避妊ピルについても、子どもたちがネットで買って使っているということも耳にする。性感染症も増えている。その様な状況下で生まれることになった小さな命。赤ちゃんには何の責任もないのに、殺されてしまったり、捨てられてしまったりする。相談さえしてもらえれば、赤ちゃんもお母さんも助けることができる。子どもが欲しいという家庭は今も昔も変わらず存在するので、殺したり捨てたりするくらいなら養子に出せばよいのである。それには健康な赤ちゃんを産んでもらわねばならない。

本ケースの様に、最初は養子に出したいと言っていて、途中で気持ちが変わることは結構ある。赤ちゃんを見たときに、母性愛に目覚め、赤ちゃんを手放せなくなる。未熟な母親へのその後の支援は大事だが、それにしても赤ちゃんにとっては可愛いと思ってくれる母親に育てられるのが一番幸せだろう。本ケースの場合は祖父母も初孫が可愛くて、手放せなくなったのである。母親の子育てに寄り添ってくれるなら何よりも、一番良い形になったと思う。こんな風に上手く行くことばかりではない。祖父母の世間体という難題は中々解決しがたく、頑なに

赤ちゃんを拒否することもある。

実父については不明のままであったが、シングルで育てている母親は多い。まだ若い母親でもあるので、いずれ結婚するとなった時に再び母親の連れ子と新しい父親との関係の問題、或いは祖父母と孫の関係という世代を超えた問題が生まれてくる可能性は否めない。その事も想像しておくことも必要だろう。

子どもを妊娠してしまうかも知れないということを想像できないわけがない。欲望のみに走ってその結果に責任を取らないということが問題である。そういう意味で、相談窓口の存在と避妊の重要性をしっかりと子どもたちに、しかも早くに教えて行かねばならないと思った事例である。

注：

(*1) 施設とは児童福祉施設のことで、乳児院、養護施設、里親、ファミリーホームなどがある。実親が養育できないなどの理由で、子どもを一定期間預かってもらう施設である。

(*2) 特別養子縁組とは、実親が子どもを育てられないときに、育ての親が養子縁組をして育てていくもので、家庭裁判所の審判により、戸籍上も育ての親の実子となる。従って長男や長女などと戸籍にも記載される。

普通養子縁組は実親との関係を継続しつつ、育ての親と親子関係を作るという縁組。戸籍上は養子や養女などと記載される。

里親制度は、一次的に預かって、家庭環境で子どもを育てる制度。